史料　3010　**お救い米事件を扱った小説**

１）三田村鳶魚

三田村鳶魚は「捕り物話」で、このお救い米事件について次のように記している。

天保７年、飢饉のあった年だ。江戸も米不足で、南町奉行所の与力で「市中御救米取扱掛」の与力仁杉五郎左衛門は対応に追われた。

江戸の有力商人というと「町方御用達」で、１０人近くいたが、その１人に芝田町に住む仙波太郎兵衛というのがいた。仙波太郎兵衛の先祖は京からやってきた牛車引き、５代目が身を起こして、江戸でも有数の両替商（実体は金融業者）となったのだが、仁杉五郎左衛門は当代の仙波太郎兵衛を呼んでいった。

「そのほうに米買付方を申しつける」

町方の与力は不浄役人とされており、江戸城に登城することなど皆無で、役人としてははなはだ貶（おとし）められていたのだが、それでも町政においては大層な権力を持っていた。仙波は両替商だ。　米の買付けなど無縁だったが断ることなどできない。迷惑だと思いながらも、

「有り難き仕合わせに存じます」

と手をついて謝辞を述べた。

仙波の米の買い付けは案の定はかどらない。それは仁杉も十分承知のうえのことで、仙波を呼び、深川佐賀町の米問屋又兵衛を引き合わせていった。

「この者をそのほうの手代として越後表に米の買い付けに差し遣わす。迫って又兵衛より、米代を為替で送ってもらいたいといってくるだろうから、その節は立て替えてやるように」

「いかほどになりましょうか」

仙波は恐る恐る聞いた。

「１万両にもなろう」

「げえー」

仙波は仰天していった。

「そんな大金、とても用立てかねます」

「一時の立て替えだ。米は値上りする一方なのだから、江戸へ運んできて売れば儲かる。何をためらっておる」

「１万両は大金です」

４、５０年前の寛政の改革時に、仙波の先代は８万両という御用金を幕府に上納した。１万両くらいわけもないと仙波の懐を見透かしてのことで、仁杉はいう。

「その方は方々に家屋敷を持っているそうな。沽券状（権利書）を質に入れる

だけでも、１万両くらい容易に都合がつこう。それでも用立てられぬと申すか」
「とはおっしゃいますが」

「お膝元でなんの大過もなく商売をしておられるのは誰のお陰だ。お上のお陰ではないのか。こんなときに、日頃の御恩顧、冥加に報いないでどうする」

仁杉からさんざんに脅されて、仙波は一万両の大金を用立てると約束させられた。そしてもし買い付けた米を回漕して、損が生じたら、わたしが負担しますという、請書も提出させられた。
米問屋又兵衛は越後に米の買い付けに出向いた。又兵衛は仙波に一万両近くを送ってくるようにと申し送った。仙波はいわれたとおりの額を為替で送った。
買い付けた米の江戸への回漕は遅れ、売却価格は仕入価格を下まわった。金額ははっきりしないが損がでた。仁杉は約束させたとおり、損を仙波に被らせた。ついでに又兵衛が越後で使った酒食遊興費も仙波に持たせた。まず,こういうことがあった。

つぎに仁杉は木材木町の地廻り米問屋孫兵衛らにも、ひそかに米を買うように命じた。こちらは損をだしていないようなのだが、仁杉としては、損をだすようなら、仙波に負担させる腹積もりだったようだ.
これらの一件を通じて、仁杉は以下のように私腹を肥やした。
一、地廻り米問屋孫兵衛らから、多分儲けの中からだろう金子二百両を受け取った。
一、孫兵衛らは、ついては「東国米問屋」という名目の問屋を認めてもらいたいと願った。仁杉は認め、謝礼として鰹節一箱と具足代金六十五両を貰い受けた。
一、仁杉と妾は以後、孫兵衛らから、年々盆暮に金二晒二分ずつ受け取ることになった。
一、仁杉が公用で大坂へ出向くとき、孫兵衛らから餞別として五十両を受け取った。
一、仁杉には鹿之助という与力見習い中の伜がおり、家出をしたり、放埒に振る舞って
いた。若者には往々にしてあることだが、そのためそのつど、親の五郎左衛門が尻拭いをし、その金をまた地廻り米問屋孫兵衛に用立ててもらっていた。

２）平岩弓枝

平岩弓枝は鳥居忠耀を主人公にあいた小説「妖怪」の中でお救い米調達のくだりを次のように表現している。

> それは天保六年から七年にかけての大飢饉の折の事件であった。
> 江戸は米問屋が米を独占し、人々の思うようには放出しなかったこともあり、米の値が上って庶民は困窮した。
> とにかく、米が足りないというので、まず米問屋の独占を廃止し、町方御用達の仙波太郎兵衛ら３名に命じて、手代達を諸国へ派遣し、米の買入れを行ったのだが、その窓口となった町奉行所は、米を買う資金として、江戸の問屋、質屋の大店十名に対して、各々２千両、また別の問屋、質屋にそれぞれ千両を立て替えるように命じ、それらの金は米価が安定した後に、幕府が買米を売りさばいて米問屋や仲買人から売米口銭を取りたてて返却することに決めた。
> にもかかわらず、時の町奉行、筒井伊賀守は、それを実行せず、放置してしまった。
> その失態を調査していたのが、当時、勘定奉行であった矢部駿河守であったという。
> また、この買米の際に、町奉行所与力の仁杉五郎左衛門、同心、堀口六左衛門など五名が不正を働いたことも明らかになった。
> もともと仙波太郎兵衛らに米の買付の役目を申しつけたのは仁杉であり、その折に仙波などから反物などの礼を受け取っている。
> その上、仙波らの買付が進まないという理由で、勝手に深川佐賀町の又兵衛という者を太郎兵衛の手代という名目にして越後へやり、五百俵余りの米を買いつけさせたが、この米の売り上げと、以前からの米相場との差額で浮いた金、二百両を仁杉は自分の懐に入れていた。
> しかも、又兵衛達が使った酒食費や遊興費を相場違いによる不足金として帳簿を作ってやったり、買いつけ米を江戸で価格操作に協力した本材木町の孫兵衛という者などを新しく米問屋に加えてやり、その礼金として六十五両を受けた他、盆暮に二両二分ずつ、また、大坂へ出張した際には饒別として五十両をもらっていた。

３）佐藤雅美

佐藤雅美は川路聖謨の生涯を描いた小説「立身出世」の中で次のように描いている。

> 飢饉のあった６年前の天保７年、町奉行所の市}御救米取扱掛だった仁杉五郎左衛門という与力が、一手に扱っていた米の買上げについて不正を働いた。
> 不正といっても、叩けば埃がでるといった程度の不正で、目をつむればつむれる。目くじらを立てるような不正ではなかった。いや、だから天保１３年のこの時点まで見逃されてきた。

４）松本清張

長編小説「天保図録」では登場人物の会話の形でつぎのように表現している。

「買上米は南町奉行所与力仁杉五郎左衛門の一手扱いで、しかもその手限りのことになっていましたから、町奉行の筒井殿も詳しいことは知っておりませぬ。矢部殿は当時勘定奉行でしたが、買上米をするたびに不正があると睨み、その資金を出している御用達の者から勘定書控を内々に出させて、その書類を吟味しておったそうですから、早くからそのへんに気をつけていたものとみえます」

　天保にはいってから飢饅が頻発し、そのたび江戸市民が飢餓に瀕した。幕府ではその救助策として遠国から米を江戸に運ばせていたが、これを「御救米」といった。

天保七年には幕府は御救米一万石を出して筋違橋外、和泉橋外に救小屋を設けて粥をほどこしている。小屋入りする者はやなぎわら五千人以上に及んだ。それでも柳原通りから浅草にかけて三十余人の餓死体をならべたほどである。

「深川佐賀町の米問屋に又兵衛という者がおりまして、これに越後米を買わせにやったところ、番頭の手違いで廻船が遅れたため、大坂、仙台の買付米と入り船が重複いたしました。すると、そのままでは相場が安くなってたいへんな損がいくのを、その損金を又兵衛には出させないで、買上米の資金を出した御用達の仙波太郎兵衛という者に出させ、帳面を押しつけてしまったそうです」

「そこにもってきて、また越後に買米に行った又兵衛の手代どもが向こうの女郎にうつつをぬかして三百両ほどの金の使い込みをやりました。仁杉は、その金も材木町の地廻

米問屋孫兵衛という者に云いつけて地廻米を買い上げさせ、その値開きの金で帳面を合わせてしまったそうです」

「そうすると、又兵衛という奴は、廻船の遅れた科を免れただけでなく、手代どもの使い込んだ金の弁償までせずに済んだわけだな？」

「けっきょく、一文も損をせずに終わりました。この仁杉の取り計らいを町奉行の筒井伊賀殿は黙認し、知って知らぬ顔をしていたといいます。」

「この買上米不正のことは、表沙汰にはされないで内々に済まされましたが、とにかくその責任を負って筒井伊賀は辞めざるを得ないところまで追い込まれたわけです。ただここに気の毒なのは仁杉五郎左衛門で、彼はこの不正一件の処分の犠牲になって入牢しましたが、ほどなく牢死を遂げたそうです。」

「佐久間伝蔵が腹に据えかねたというのはこの片手落ちの処分で、仁杉が深州

佐賀町の米問屋又兵衛に損をかけさせなかったのは、これまで又兵衛がたびたび江戸に御救米を運んできた功労を考えていたからです。いわば、特別の気持ちで取り計らってやつたものを、誰かのために不正行為とキメつけられてしまった。そのために、自分をかわいがってくれていた仁杉が牢死をする始末になった。仁杉に私心があったわけでもないのにこういう非道に遭わねばならなかった、それもこれも堀口六左衛門が矢部殿の口車に乗せられてべらべらとしゃべったからだ、しかも堀口はほどなく定廻筆頭と出世して、密告の口を拭って知らぬ顔をしている、とてものことに秘密の多い奉行所でこのような人問を生かしておくわけにはいかない、これが佐久間伝蔵が堀口に刃傷に及ぼうとした考え方だったようでございます」

5）松岡英夫

松岡英夫は「鳥居耀蔵」では、概略次のように説明している。

南町奉行筒井伊賀守政憲の下役である与力の仁杉五郎左衛門が市中御救米取扱掛として御用達の仙波太郎兵衛ほか２人に命じて買米をやらせた。このとき、仁杉は反物を貰った。　仁杉は深川佐賀町の米問屋又兵衛を仙波の手代という名目にして越後米の買付けをさせ、もうけた金から 200 両受けとった。船が遅れ他の買米と同時期になったため、相場が下がり損をしたときには、その損金を又兵衛に負担させずに仙波に負担させた。また越後に買付けにいった又兵衛の手代が使い込みをした。その金も他の米問屋に命じ、地廻り米を買い上げさせて、その差金で帳尻を合わさせた。この結果、又兵衛は一銭の損もしないで済んだ。このほか収賄もしていたというものであった。

以上のように、お救い米買付は後に幕閣の権力争いに取り上げられ、五郎左衛門は投獄、獄死の運命をたどることになる。　しかし五郎左衛門たちが江戸に集めた御救米そのものは御救小屋で窮民に施され、飢餓に苦しむ江戸市民の救済に大きく貢献し、担当した町奉行筒井伊賀守以下がお上から褒章を受けた。これを受けて筒井は五郎左衛門達の労をねぎらったが、飢饉が終息するとやがて世間から忘れられていった。